

❖ 講演会・研究セミナー ❖

講演会

莊嚴経論と大乘莊嚴経論

2024年2月16日(金)15:15~17:00

龍谷大学大宮学舎 北翼 202 教室



会場の様子



また *sūtrālamkāra* という語は瑜伽論撰決択分の写本において、「如来によって説かれた諸経典の意味を如実に開示する」と定義されている。そこで挙げられる五つの比喻は『大乘莊嚴経論』の偈にも確認されるものである。松田氏は『大乘莊嚴経論』の作者について、先行研究にならって弥勒・無著・世親の三者であるとの立場を取るが、その三者は撰決択分に示される作者・解説者・造論者という三者にそれぞれ該当するのではないかと述べた。撰決択分における *sūtrālamkāra* はテキストの名前ではなく、先に示した定義を示す概念として用いられていた可能性が高い。そしてその定義は、松田氏が示してきた『莊嚴経論』からの引用例に完全に合致すると語った。

松田氏は「同じタイトルの論書が全く無関係に存在する」ことは考えにくく、両者には後行するものの先行するものに対する模倣が見られるだろう、と語った。『莊嚴経論』と『大乘莊嚴経論』には論述スタイルに類似点が見られ、後行する『大乘莊嚴経論』は先行する『莊嚴経論』の影響を受けていた可能性がある。『莊嚴経論』が『大乘莊嚴経論』の前提にあるとすれば、『大乘莊嚴経論』というタイトルには「大乘の莊嚴経論」という意味が見えてくるといえる。

松田氏は『莊嚴経論』からと思われるアシュヴァゴーシャの偈は試作技術が高く、どれも美しいものであると述べ、未発表の偈を紹介して講演を締め括った。講演後は、『莊嚴経論』と『大乘莊嚴経論』の関係から見えてくるであろうという新たな知見について、フロアと活発な議論が行われた。

